

死から生をとらえなおす保育の授業

—『誕生日』を教材にした授業の検討—

小清水 貴子^{*1}

I. はじめに

高等学校家庭科の保育領域の目標は「乳幼児の心身の発達と生活、親の役割と保育及び子どもの福祉について理解させ、子どもを生み育てることの意義を考えさせるとともに、子どもの健全な発達のために、親や家族及び社会の果たす役割が重要であることを認識させる」ことにある¹⁾。しかし、身近に小さい子どもとかかわる機会の少ない生徒たちにとって、一人の人間として赤ちゃんをイメージすることは難しく、「妊娠すれば、あとは元気な子どもが生まれてくるのを待つだけ」と考える生徒もいる。

家庭科は人の一生を扱う教科であり、家庭生活を中心とした人間の生活を対象にしている。ここでいう人間の生活とは、自分や自分の家族の生活だけを示すのではなく、社会に暮らすさまざまなひとの生活を含む。生活は、ひと、モノ、環境が相互に関わり合って成り立っており、生活をとらえる際には物的資源のモノだけでなく、人的資源であるひととの関係も重要な意味を持つ。

しかし、少子・高齢化や核家族化が進む現代社会において、生徒たちが、生活のなかで他者とかかわる機会は減少し、人間関係が希薄化している。その結果、生徒自身も社会を構成するひとりであり、社会はさまざまなひとが共生しあって成り立っているということに対する意識の低下が危惧される。近い将来、社会で次世代を育成する立場に立つ高校生に自分と同じように他者を大切に想い、かけがえのない命に真摯に向き合う姿勢を育てることが必要である。

命に関する教育は、多様な教科でその必要性が示唆され、授業が実践されている²⁾。また先行研究では、得丸ら³⁾は大学生や現職教員に死に対する意識調査を行い、「人間の一生を取り扱う家庭科を中心として他教科と連携して、「死の教育」を実践・展開することは、生命尊重教育を重要視する学校教育において意味のある重要な教育である」という結論を得ている。また、小・中・高等学校の児童・生徒を対象にした死別の悲嘆に関する意識調査から、悲嘆を伴う死別対象者については小学校レベルと中・高等学校レベルに、悲嘆を伴う死別時の感情と行動の関連では高校生レベルと小・中学生レベルに区別できることを明らかにしている。そして、家庭科をはじめとする「いのち」に関連する教科の基礎として、横断的に「生」「死」「いのち」「生きる」ことに関係した「いのち教育」の学習展開の必要性を示唆している⁴⁾。

生きることを学ぶことは、同時にいのちについて学ぶことである。いのちは有限であり、死を避けて考えることはできない。しかし、家庭科の教科書では、「生」「生きる」の用語は多く使われるが、「死」についてはほとんどふれられていない。保育領域における死に関

^{*1} 長崎大学教育学部

する記述をみると、乳幼児が家庭内事故死で死亡する例として「溺死」が用語として使用されているのみである⁵⁾。しかし、医療技術が発達した現代社会においても、出産で母子が命を落とす危険性は皆無ではない。また、望まれて誕生する生命でも、必ずしも健常児として迎えられると限らない出産の現実⁶⁾もある。そうした意味では、昔も今も変わらず、妊娠・出産は一人の人間の命がこの世に誕生する大きな試練である。

したがって、保育の学習を進めるにあたり、健康で元気に子どもが生まれることを当たり前と考える生徒たちに、生と死は切り離せないものであり、生命を育むことの意味を改めて再認識させることが必要であるといえる。

II. 誕生死を取り上げる意味 —人工妊娠中絶と誕生死の違い—

そこで、乳幼児の成長・発達の授業に入る前に、自分と同じ命をもつ存在として子どもを捉える視点を育むことを目的として、教材として、流産・死産・新生児死で子をなくした親の会著『誕生死』⁷⁾を取り上げた。『誕生死』には、出産前後に子どもを亡くした親の手記が集められている。手記に込められた子どもに対する親の心情にふれることで、生徒たちが死から生をとらえなおし、生命の誕生が決して当たり前のできごとではないことを認識させるのに有効であると判断した。

授業で使用した手記は井上恵さん（仮名）ご夫婦の「とってもきれいな赤ちゃんよ」である。結婚4年目にして初めて妊娠し、出産予定日を2ヶ月後に控えた恵さん夫婦に、突然、赤ちゃんが胎児水腫だと告げられる。即座に検査入院をするが、原因不明のまま妊娠33週と1日で赤ちゃんはこの世を去る。分娩室で他の妊婦とベッドを並べての出産。手記には、「おめでとう」の言葉も、産声もない出産に、懸命に立ち向かう恵さんの想いが溢れている。また、恵さんの夫は、一目も会うことなく抱き上げられなかった我が子に対して父親としての想いを、そして妻に対して夫としての想いを綴っている。

保育の授業では、人工妊娠中絶を通して生命の尊さを生徒に伝えることがよくある。そこでつぎに、授業における人工妊娠中絶と誕生死の扱い方を比較し、両者の相違点を表1にまとめた。

表1 人工妊娠中絶と誕生死の違い

	人工妊娠中絶	誕生死
生命に対する考え	生命は尊い	生命は尊い
胎児に対する考え	胎児も一人の人間	胎児も一人の人間
生命の受け止め方	産むか産まないか選択権がある	運命そのもの。選択権はない
男女の立場	女性側から語られることが多い 男性は傍観的になりがちである	女性・男性の両面から語られる

生命や胎児に対する考え方は、人工妊娠中絶、誕生死ともに、生命は尊く、胎児も一人の人間としてとらえる視点は共通している。しかし、生命の受け止め方についてみると、人工妊娠中絶には生命の選択権があるが、誕生死にはない。誕生死は運命そのものであり、胎児の死を受け入れることしかできない。

また、人工妊娠中絶は、母体との関係で取り上げられることが多く、女性側から語られることが多い。したがって、男子生徒にとっては、「彼女が生きたいといえば、自分はそれに従う」など傍観的になりがちである。一方、誕生死は男性・女性の両性の立場から語られている。

以上から、誕生死は人間の手では操作できない生死に向き合うことを生徒に考えさせ、女子生徒だけでなく男子生徒も我が身に置き換えて、生命の誕生について考えることができる教材であるといえる。

Ⅲ. 研究の目的

本研究は、高等学校家庭科において、『誕生死』を教材にした授業を実践し、学習から1年後の授業に対する生徒の意識調査から、本授業の成果を検討する。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究対象および調査時期

研究対象は、国立大学法人T大学附属S高等学校2年次で選択科目「発達と保育」の受講者48名（男子4名、女子44名）に対して授業を行い、学習から1年後に保育の授業に対する意識調査を実施した。意識調査の回答者は36名（男子3名、女子32名）で、有効回収率は75.0%であった。授業は2006年6月に、意識調査は2007年7月に実施した。

2. 授業実践の概要

年間の授業計画は表2に示したとおりである。単元「3. 母性の保護」において『誕生死』を教材とした授業を実施した。「3. 母性の保護」では、(1)妊娠のしくみ、(2)母胎の健康管理と母体保護法、(3)妊娠・出産にかかわる医療技術と生命倫理、(4)出産のしくみと生命の尊さについて、それぞれ2時間ずつ設定した。

本実践は(4)出産のしくみと生命の尊さにあたる。表3に授業展開を示した。なお、前時にあたる「(3)妊娠・出産にかかわる医療技術と生命倫理」では人工授精、体外受精、代理母出産、出生前診断、男女産み分けなどを取り上げた。社会問題として2004年に代理母の是非が論じられたことから、新聞記事や資料集を使って生命を育むことをテーマに、生命倫理や出産における女性の自己決定権（リプロダクティブヘルス/ライツ）にふれた。

1学期	1. 保育の意義	2時間	
	2. 思春期の心身の特徴と性	4時間	
	3. 母性の保護	8時間	※本時
	4. 乳幼児の成長・発達	8時間	
2学期	5. 保育体験学習(1)(2)	4時間	
	6. 乳幼児の養護	16時間	
3学期	7. 家庭保育と集団保育	4時間	
	8. 保育体験学習(3)	2時間	
	9. 児童福祉	4時間	

表3 本時の学習活動案

単元	3. 母性の保護 (4)出産のしくみと生命の尊さ (7・8時間/全8時間)		
本時の目標	○出産のしくみを理解する。 ○家族で新しい生命を迎えることの意味, 産み出される命の尊さについて考える。		
準備	教科書・配布プリント・資料・学習記録ワークシート		
評価の観点	○出産のしくみを理解することができたか。 ○家族で生命を育む意味や生命の尊さについて考えることができたか。		
	学 習 活 動	指導上の留意点	留 意 点
導入 (10分)	○前時の学習活動を振り返る。 ○本時の学習活動について知る。	○妊娠期について思い出させる。 ○本時の学習目標を確認する。	○ワークシート 配布
展開 (70分)	○出産のしくみを理解する。 ○『誕生死』から出産における現実を知る。 ○お産の歴史を知る。 ○出産に関わる仕事を知る。	○ワークシートの資料を使い, 出産の流れを理解させる。 ○手記を読み聞かせ, 胎児に向き合う家族の気持ちを考えさせる。 ○進路につなげる。	○手記プリント 配布
まとめ (10分)	○学習活動を通して, 感じたことを記入する。 ○次時の学習の予告をする。		○ワークシート 回収

3. 分析方法

意識調査の調査項目を, 表4のように設定した。

設問1は「とても思う」「わりに思う」「少し思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「ほとんど思わない」「全く思わない」の7件法で回答を求めた。分析では, 意識の高さについて低い方から1～7点で数値化し, 意識を表す測定値とした。同様に, 設問4

表4 意識調査の項目

<p>1. 各学習項目について, あなたは, どの程度, 学んでよかったですか。(7件法で回答)</p> <p>①妊娠・出産のしくみ(講義) ②誕生死(手記の朗読) ③人工妊娠中絶(ビデオ)</p> <p>④里親制度(本・資料) ⑤幼児観察 ⑥保育体験学習(1)ワークショップ</p> <p>⑦保育体験学習(2)調理実習 ⑧保護者へのれんらくノート作成</p> <p>⑨乳幼児の発達(講義) ⑩乳幼児の養護(講義) ⑪保育体験学習(3)交流活動</p> <p>⑫児童福祉(講義)</p> <p>2. 上記の項目で, あなたがもっとも印象に残っている項目を3つあげ, 理由を書いて下さい。</p> <p>3. あなたが1年間の保育の授業で得たことは何ですか。</p> <p>4. 『誕生死』を教材にした授業について, どのように感じましたか。(4件法で回答)</p> <p>①生命の尊さについて考えることができた。</p> <p>②出産における医療について考えることができた。</p> <p>5. 誕生死の授業を受けて, あなたが感じたことを自由に記述して下さい。</p>
--

は「とくにそう思う」「思う」「あまり思わない」「思わない」の4件法で回答を求めた。分析において、意識の高さについて低い方から1～4点で数値化し、意識を表す測定値とした。その後、設問1の回答結果について合計点の平均値を算出し、平均値以上のグループを保育の授業に対する意識が比較的高い上位群、平均値未満のグループを意識が比較的低い下位群として区分し、集計・分析を行った。考察にあたっては、授業直後に生徒がワークシートに記述した『誕生死』の感想文を使用した。

IV. 結果および考察

1. 授業における生徒の様子と『誕生死』に対する感想

生徒がワークシートに記述した感想を表5に示した。

表5 生徒の感想

- | |
|---|
| <p>○ この話を読んでとても切なくて悲しい気持ちになった。出産というのはとてもうれしくて、幸せをもたらすものだと思っていたけど、必ずしもそうではないんだと知った。私はこの話を読むことで、命の尊さを改めて感じる事ができた。井上さんが言った「無事にこの世に生を受けることは決してあたりまえのことなんかじゃない」という言葉が胸に響いて、印象に残っている。私たちがこうして生きていることは幸せなことで、ただそれだけですばらしいことなんだということを胸に留めておかなければならない。そして、このような悲しい出産を迎える家族のために、これからの医療を心や内面も重視した良いものへと発展して行ってほしいと思った。(女子)</p> <p>○ 最初はありがちな流産のお話だと思っていたけど、読んでみたら全然違った。妊娠33週で子どもが亡くなってしまったら、自分はどうするんだろう。つらくてつらくてずっと立ち直れない。子どもが死んでしまうかもしれないと告げられたとき、子どもと語り尽くした翌日に子どもが旅立っていったときの気持ち。隣では元気な赤ちゃんを、一方では亡くなった赤ちゃんをこの世に産み出すために激痛に耐える人がある。子どもを産むことには変わらないけど、誕生と亡くなった命を産み出すのでは、心の負担が全く違う。でも、このお母さんは「とってもきれいな赤ちゃんよ。」という言葉に救われたと思った。毎日、亡くなった子どもを抱きに行ったお母さんも、子どもを愛するが上に抱きに行けなかったお父さんも、どちらも子どものことを思う気持ちは同じで、とても切ないなと思った。自分が授かった命をもし元気に産み出すことができなかつたら、私は受け止めることができるだろうか。受け止められるような人間として成長していきたい。(女子)</p> <p>○ この話を聞いて泣きそうになったし、すごい感動した。いきなり原因不明の突発的な胎児水腫に赤ちゃんがなってしまうなんて思ってもいなかったらうし、自分も思わなかった。「とってもきれいな赤ちゃんよ」その赤ちゃんをほめる言葉が、他のどの言葉よりもうれしかったという言葉に同感だった。たとえもう死んでしまっている子どもでも、自分の子をほめられれば誰でもうれしいと思った。この話の中で自分が一番感動したところは、井上さんの夫の手紙だった。夫もちゃんと赤ちゃんのことを考えてあげていたんだなあと思った。あと井上さんはかわいそうだったけど、すごくいい病院で井上さんを支えてくれたと思う。最後に赤ちゃんへの手紙に書いてあることは本当にそうだったと思った。だから自分も命を大切にしたいと思った。聞いている時に泣かなくてよかったあ～って思った!!(男子)</p> <p>○ 赤ちゃんを産むことは、中絶以外は幸せなものばかりだと思っていました。だけど読み聞いていたら、自然に涙がボロボロとあふれてきました。産む産まないを自分で選択する中絶とは違う。中絶もすごく悲しいけど、自分で決断が出来るし、何より自分でちゃんと決めた訳だから、心構えができる。井上さんは悲しみを乗り越えて、本当に強いなと思います。(女子)</p> |
|---|

また、授業における生徒の反応の特徴は、以下のとおりである。

- (1) 生徒の多くは、出産時に子どもが亡くなることがあることは理解していたが、誕生死という言葉を知っている生徒はいなかった。
- (2) 『誕生死』のプリントを音読し始めると、教室は水を打ったようにシーンと静まりかえり、涙する生徒もいた。
- (3) ワークシートに記述された感想は、通常の授業よりも記述量が多いものが数多くみられ、生徒の関心が高い教材であるのではないかと思われる。記述された内容をみると、出産が必ずしも喜びをもたらすものではないことへの気づきや、母親とともに父親の子どもに対する愛情の深さを感じ取っていた。また「私だったら・・・」と、自分に置き換えて考えた生徒もいた。

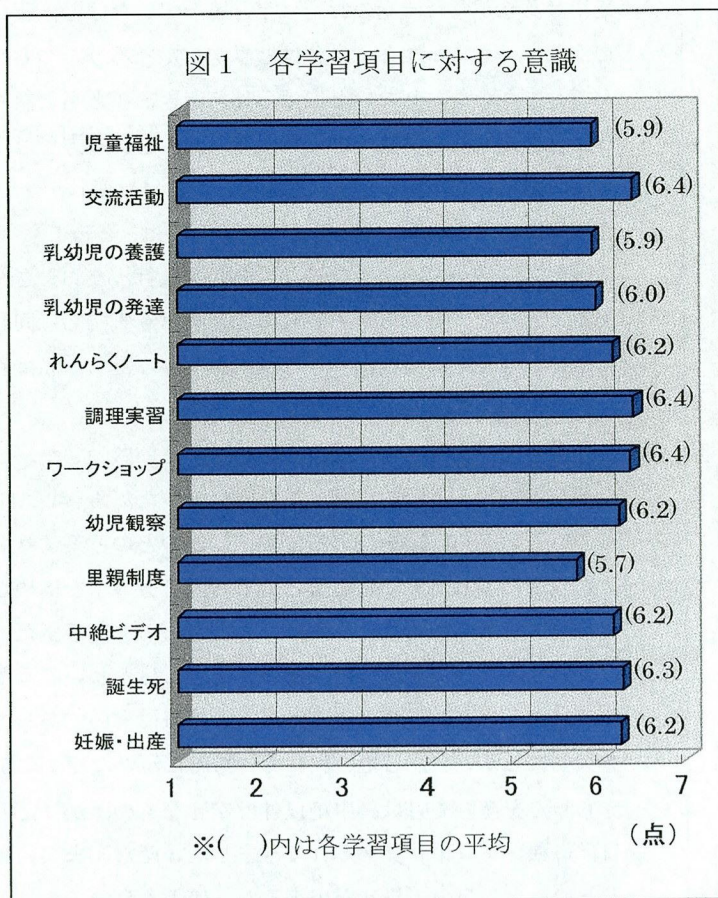
2. 学習から1年後の意識調査

2.1 各学習項目に対する意識

1年間の学習を通して「あなたはつぎの学習項目について、どの程度、学んでよかったですか」の回答結果を図1に示した。全体的にみて、生徒は保育の学習をしてよかったですと捉えていることが読み取れる。

なかでも、最も学んでよかったですと回答した項目は、「ワークショップ」「調理実習」「交流活動」の3項目で、いずれも保育体験学習であり、平均は6.4であった。この保育体験学習は、年間に3回に分けて、幼児と一緒に、稲刈りや幼児向け食育ワークショップ、収穫した米を使った調理実習、学校の校庭で遊ぶ交流学习を行った。生徒は、各回の活動の様子について、幼児の保護者に対して「れんらくノートを作成」という学習活動も併せて行った。生徒にとっては、実際に肌で幼児とのかかわり方を学ぶことができ、とくに満足度が高かったと思われる。つぎに高かったのは「誕生死」で6.3、「妊娠・出産のしくみ(講義)」「人工妊娠中絶(ビデオ)」「幼児観察」「保護者へのれんらくノート作成」が6.2であった。

全12項目の学習項目に対する合計点の平均値は73.8点であった。そこで、平均値以上のグループを上位群、平均値未満のグループを下位群として区分し、各項目について分散分析を行った。結果は表6に示したとおりである。



保育体験学習の「調理実習」では有意差は認められなかった。「ワークショップ」は5%水準で有意($F_{(1,34)}=5.20, *p<.05$)であり、それ以外の項目はすべて1%水準で有意差があった。「幼児観察」($F_{(1,34)}=10.92, **p<.01$)と「保護者へのれんらくノート作成」($F_{(1,34)}=11.80, **p<.01$)は保育体験学習に近い学習内容であり、F値がその他の講義やビデオ学習に比べて小さかった。したがって、学習項目の印象の差は、体験学習と座学の違いによると推察される。

表6 印象に残っている学習項目

学習項目	上位群	下位群	F 値	
	[N=22]	[N=14]		
	Mean	Mean		
	S.D.	S.D.		
1 学期	妊娠・出産のしくみ (講義)	6.73 0.45	5.50 0.91	27.62 **
	誕生日(手記の朗読)	6.77 0.60	5.36 1.39	16.62 **
	人工妊娠中絶(ビデオ)	6.77 0.42	5.36 1.11	27.65 **
	里親制度(本・資料)	6.36 0.71	4.79 1.21	23.03 **
	幼児観察	6.64 0.64	5.64 1.11	10.92 **
2 学期	保育体験学習 (1)ワークショップ	6.64 0.48	5.93 1.28	5.20 *
	保育体験学習 (2)調理実習	6.59 0.65	6.07 1.16	2.78 ns
	保護者への れんらくノート作成	6.55 0.58	5.50 1.18	11.80 **
	乳幼児の発達(講義)	6.50 0.66	5.21 0.86	24.22 **
3 学期	乳幼児の養護(講義)	6.55 0.66	5.00 0.65	44.96 **
	保育体験学習 (3)交流活動	6.73 0.54	5.79 1.08	11.35 **
	児童福祉(講義)	6.55 0.50	5.00 0.76	51.64 **

+p<.10 *p<.05 **p<.01

2.2 印象に残っている学習項目

つぎに、印象に残っている学習項目の上位3つを選択してもらった結果を整理し、集計した。選択者数の多かった項目は、「人工妊娠中絶(ビデオ)」「保育体験学習」「誕生日」の順であった。人工妊娠中絶については、講義を行い、その後、NHKで放映されたドキュメント⁸⁾を視聴させた。内容は、20代前半のカップルが、産婦人科の医師との対話を通して中絶にどのように向き合うかというものである。印象に残っている学習項目として選択した理由をみると、「内容が壮絶だった。男女ともに見せるべきだと思う」「心が重くなったけど、学ぶべきものだと思った」「中絶をすることの恐ろしさや悲しみ、背負っていく覚悟などとたくさんの知識を学ぶことができた」などの記述がみられた。また、「誕生日」を選択した理由については、「生と死をどちらとも考えさせられた」「死産の人の体験がすごく印象に残っていて、本当にかわいそうだった」「命を重く考えられるようになったから」「子どもが生まれることの素晴らしさがわかったから」などであった。

つぎに、 χ^2 検定を行った。結果は表7のとおりで、人数の偏りは有意であった($\chi^2_{(8)} = 25.66, p < .01$)。残差分析では、「保育体験学習」の1位と「保護者へのれんらくノート作成」の3位が1%水準でプラスに有意であり、「誕生日」の2位は5%水準でプラスに有意であった。また、「保育体験学習」の2位と「保護者へのれんらくノート作成」の1位は、5%水準でマイナスに有意であり、「誕生日」の1位は10%水準の有意傾向のマイナスの残差があった。

プラスに有意であった「保育体験学習」と「保護者へのれんらくノート作成」は、前述

表7 印象に残っている学習項目

学習項目		1位	2位	3位
人工妊娠中絶(ビデオ)	実測値	9	9	4
	期待値	8.25	8.25	5.50
	調整された残差	0.396	0.396	-0.886
保育体験学習	実測値	14	4	3
	期待値	7.88	7.88	5.25
	調整された残差	3.280**	-2.075*	-1.347
誕生日	実測値	3	10	3
	期待値	6.00	6.00	4.00
	調整された残差	-1.757+	2.342*	-0.654
妊娠・出産のしくみ(講義)	実測値	1	3	3
	期待値	2.63	2.63	1.75
	調整された残差	-1.335	0.308	1.148
保護者への れんらくノート作成	実測値	0	1	5
	期待値	2.25	2.25	1.50
	調整された残差	-1.982*	-1.101	3.447**

+p<.10 *p<.05 **p<.01

のように両者の学習活動の関連性が強い。したがって、幼児と直接ふれあう保育体験学習は、生徒にとって印象に残りやすい学習活動であることがわかった。一方、「誕生日」は、保育体験学習のように身体を動かす学習活動ではなく、いわゆる座学であった。しかし、生徒の感想文をみると、手記を通して、これまで知らなかった世界を知り、亡くなった赤ちゃんに対する親の深い愛情に感動を覚えた生徒が多くいた。その結果、印象の強かった学習項目としてあがったのではないかと推察される。

2.3 1年間の授業で得たこと

1年間の保育の授業で得たことに関する自由記述では、「子どもとの接し方」「子どもの成長や育て方」「子どもの吸収力のすごさ」「相手を思いやることの大切さ」「子どもに対する意識がかわった」など、子どもに関する知識や子どものかかわり方を学んだ様子がかがえた。また、「命の大切さ。いま私がここにいることの意味」「親のありがたみ。このように生まれたことの奇跡」「親の子どもに対する愛情を知った」「出産の大変さと健康で生まれて生きることの幸せを感じました」「出産や育児についての知識と命の大切さ」など、命の重さを感じたり、自分を産み、育ててくれている親に感謝する記述が見られた。

男子生徒の回答に、「最初は女性に関係があって男性には関係なかったけど、男性のサポートにより女性が助かることを学びました」という記述があった。母性の保護の学習では男子生徒は傍観的になりがちであるが、自分に何ができるかという視点で学習を行うことができたといえる。

2.4 誕生日を教材とした授業に対する意識

つぎに「あなたは『誕生日』を教材にした授業について、どのように感じましたか」の設問についてみる。保育の授業に対する意識が比較的高い上位群と、意識が比較的低い下位群に分けて分散分析を行った結果は、表8に示したとおりである。

2つの項目ともに、1%水準で有意差があった。記述をみると、「とても印象的で命の大切さを知った。親に感謝の気持ちを改めて思った」「こんなこともあるのだと衝撃的でした。聞いていたら涙が止まらなくなりました」「子どもの大切さを知った。改めて命の大切さがあった」「自分が生きているのは当たり前のように思っていたけど、本当はすごいこと

表8 誕生日を教材とした授業に対する意識

設問項目	上位群 [N=22]	下位群 [N=14]	F 値
	Mean S.D.	Mean S.D.	
①生命の尊さについて考えることができた	3.91 0.29	3.14 0.74	17.92 **
②出産における医療について考えることができた	3.50 0.50	2.71 0.80	12.51 **

+p<.10 *p<.05 **p<.01

なんだなあと思いました」「話を聞いている最中に涙をとめることができなかつたけど、やっぱり考えさせられることが多かった」などがあつた。生徒のなかには、この手記との出会いから、将来、助産師を志すことを決めた生徒がおり、「悲しい出産の意味が初めはよくわからなかつた。でも、この授業を通してもっと知りたいと思うようになった」と記述していた。1年前の授業で扱った教材を鮮明に記憶している生徒が多く、生徒に強い刺激を与えた教材であることがわかる。

また、授業直後の生徒の感想から、この世に生まれることは決して当たり前のことではないことを実感したり、胎児であるまだ見ぬ我が子に対する親の愛情を感じた様子うかがえた。生徒たちは教材に託されたメッセージを適切に受け止め、生命の尊さについて考えることができたといえる。

V. まとめと今後の課題

本研究から得られた結果は、以下の3点である。

- (1) 学習から1年後の意識調査において、生徒の意識に残りやすいのは座学よりも体験学習であつた。しかし、座学であっても、誕生死のように生徒の規定概念を打ち破るような意外性のある教材は、生徒の印象に残ることがわかつた。
- (2) 意識調査の結果、保育の授業に対する意識が比較的高い上位群、意識が比較的低い下位群では、保育体験学習に対する意識にはそれほど差がみられなかつたが、座学に対する意識では有意な差がみられた。したがって、座学の学習を充実させることが、授業に対する生徒の意識を向上させる手立てになると推察される。
- (3) 生徒の感想文や意識調査の結果から、亡くなった赤ちゃんを産むつらさ、望まない妊娠によって中絶される命とどんなに望まれても生きられない命、まだ見ぬ我が子に対する家族の想いなどについて感じ、考えた様子うかがえた。誕生死は、生命の尊さを生徒に考えさせる教材として有効であるといえる。

社会で他者と共生するには、自分の命と同じように他者の命の重みを感じ、自己主張するだけでなく、それぞれの人の想いに耳を傾けられることが求められる。しかし、高校生が社会で他者とかかわり、社会に暮らすいろいろなひとの想いにふれる機会は少ない。したがって、授業において手記や新聞記事などを用いて、社会に生きるひとびとの立場や想いを、生徒に積極的に伝え、多様な価値観やものの見方、考え方にふれさせることが必要である。

また、保育領域における障害児に関する記述について、2003年度発行の高等学校家庭科教科書「家庭基礎」10冊、「家庭総合」8冊の計18冊を調査した結果、記述があつた教科書は1社の2冊⁹⁾のみであつた。そこには、たとえ障害をもって生まれてきても、家族でそのかけがえない生命を育てていくこと、その場合にまわりの手助けが必要となることが記述されていた。家庭科は、子どもも、大人も、健常者も、障害者も、みんなが共に生きる社会の実現を目指す教科である。しかし、教科書にはそうした福祉の視点がほとんど登場していない。人生には自分で選択可能なことがあるとともに、回避したくても回避できない現実を受け入れなければならないこともある。死や障害と向き合わなくてはならないときもある。したがって、今後、家庭科の授業において、生と死、そして健常児だけでなく、障害をもつ子どもたちに対する理解を加えていく必要があるといえる。

参考文献

- 1) 文部省, 高等学校学習指導要領解説家庭編, 2000年3月
科目内容の改善に関して, 「少子化の進展に対応して, 子どもがどのように育つのかに関心を持ち, 子どもを生き育てることの意義を理解する学習を重視するために, 子どもの発達と保育に関する内容の充実を図った」と述べられている。
- 2) 清水恵美子, いのちの教育—高校生が学んだデス・エデュケーション—, 法蔵館, 2003
近藤卓, いのちを学ぶ・いのちを教える, 大修館書店, 2002
金森俊朗, いのちの教科書, 角川書店, 2003
- 3) 得丸定子, 田原加津江, 嵐美香, 学校教育における「死の教育」: 死に対する意識調査から見た学校教育とのかかわり方, 日本家庭科教育学会誌第43巻第1号, 2004
- 4) 得丸定子, 吹山八重子, 悲嘆を伴う死別に関する意識調査—小・中・高等学校の児童・生徒を対象として, 日本家庭科教育学会誌第47巻第4号, pp. 358-367, 2005
- 5) 高等学校家庭科教科書 家庭総合／家庭基礎, 東京書籍, 2007
項目「子どもの健康と生活」の「子どもの事故と安全の確保」において, 「乳幼児の死因の第1位は, 不慮の事故である。なかでも, 食べ物やおもちゃによる窒息が多く, 交通事故, 溺死, 転倒・転落事故が続いている」と記述されている。
- 6) 野辺明子・加部一彦・横尾京子編, 障害をもつ子を産むということ, 中央法規, 1999
- 7) 流産・死産・新生児死で子をなくした親の会著, 誕生日, 三省堂, 2002
- 8) NHKスペシャル「いのちの対話—ある2人の医師の取り組み—」2005年10月1日放送, NHK日本放送協会
人工妊娠中絶を希望し「中絶しても, またこの子に会える気がする」と語る20代前半の女性やカップルの相談や, 里子に出される新生児の里親探しなど, 人工妊娠中絶を希望する若者に対する産婦人科医師の取り組みを紹介している。
- 9) 高等学校家庭科教科書 家庭総合／家庭基礎, 大修館書店, 2003
保育領域「親になることを考えよう」に「障害をもつ子どもと親のかかわり」として記述がある。